



TITLE:

水星の太陽面通過観測に参加して

AUTHOR(S):

津野田, 誠吾

---

CITATION:

津野田, 誠吾. 水星の太陽面通過観測に参加して. 天界 1937, 17(195): 333-335

ISSUE DATE:

1937-06-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167491>

RIGHT:

## 水星の太陽面通過觀測に参加して

臺中市 津野田誠吾

今度の水星の太陽面通過を觀測する爲めに、既報の通り花山よりは公文理學士が遙々渡臺せられて、先年山本臺長が花山から運搬して臺中第二中學校庭に据付けられた25種ブラシヤ1反射鏡を使用される事になった。私は臺中のアマチュアの一人として、この觀測に参加し同氏のクロノメータ1を開きながら觀望した感想を述べて見たい。元來私は數年前から自分の設計で6吋屈折赤道儀を完成して日頃の宿望を果した事を喜んでゐたが、實際に觀測して見て、頗る失望せざるを得なかつた。其以來殆んど使用せずに放置してあつたが、偶々山本博士の渡臺の際に對物玉を一時花山に御預けする事にしたが、公文氏の來臺を偶然の機會と喜んで、御持參を願ひ今度の觀測及び火星の觀望に使用し度いと思つて交渉して見たが、生憎臺長が南米に出張中であつて、この度の觀測の間に合はなかつたのは残念である。この間自分のために種々と配慮を煩はし、且山本臺長からの電報に接して甚だ恐縮した次第である。其處で私よりは「御配慮を謝す公文氏本日着臺の豫定」と打電した。

公文氏は着臺の後直ちに彰化高女の松本教頭と共に拙宅を訪問され、互に胸襟を開いて何の氣兼ねもなく遂に11時頃迄話し込んでしまつた。

翌9日は日曜なので午前中に二中校庭に松本氏を加へて3人參集して、運轉時計の整調に取り懸つたのであるが、何うも具合よく行かない。全部解體して摩擦部を凡て拭き清めて見た。然しこの鏡臺の床が細砂を布き詰めてあるので、隙間風に煽られた砂塵が鏡基の滑動部にも時計にも深く喰ひ込んで居るので、容易に取り除くことが出来ない。然も解體拭清の間にも、人間の手と云ひ、螺子廻しと云ひ、忽ち砂塗れになるので、完全な拭清は時計丈けでも不可能であつた。石油を注下して全部洗つて、新しい油を注下しても見た。果ては極軸やウオームギヤも修繕して見たが、依然として時計は好く運轉しない。この作業で全く一日を空費した。

10日は月曜日で、私は醫院の外來診察であるので2時頃校庭へ行つた。

公文氏は1人でコツコツやつてゐられる。私が加はつて2人でやつてゐる間に醫院のレントゲン技師も應援に来て、3人で又昨日の通り運轉機構の整備に取掛つた。この日は夜遅く迄蠟燭と懷中電燈の照明の下に全く汗みどろな奮闘を續けたが遂に成功しなかつた。止むを得ず不格好ながら鏡筒に石を結びつけて漸やく急場の間に合はせとした。3人寄れば文珠の智慧と云ふが、終ひに吾々各自は一人前ではなかつたのである。この間公文氏の精勵は一通りではなかつた。それは使命を帶びて長途遙々參向したと云ふふ責任感を持つてられることは云ふまでもないが、10時頃より日沒迄は滿身赫灼たる日光を浴びて作業しなければならない。吾等こそ聊か臺灣の夏に馴れてゐると云ふものゝ、公文氏は全く初めてである。然かも吾等は時々テントの蔭に隠れたのであるが、氏はこの場合一人のプラクチカントである。何事なりとも自分が體稽して人に委ねると云ふ事は出来ない。正に滿身淋漓であつた。慙くしてこの日も又不調に終つたが、「何いかなかつたら5分や10分の間、又石をぶらさげてやるさ」など互に淋しく慰め合つて明日を期して別れた。今日は愈々當日である。私は1時頃に校庭に行つた。公文氏は前日と同様機構部の調整に懸命であつた。然し運轉不調は依然として前日の如くであつた。松本氏が5糎屈折機を持つて來會せられた。私は3吋屈折で、二中の教諭諸君や生徒のあるものも思ひ思ひの道具でメインテレスコープの傍近く陣取つた。時間も迫つて来る。愈々思ひ切つて石包みをぶら下げる事にした。公文氏はメインテレスコープに、松本氏は之れに附屬の8糎ファインダ1に、私は自分の3吋に、醫院の水田技師は松本氏の5糎にそして學校の方々は各自の部署にひたと身を寄せられ、4、5名の記者も見へた。學生が謂集して來た。クロノメータ1の讀方は二中の秦泉寺教諭である。時は猶豫なく刻んで4時10分となつた。秦泉寺教諭の讀み上げる半秒毎の掛聲は時と共に段々と骨の髄まで響いて来る。吾等は緻密なる松本教諭が投射によつて定められた正確なる水星像の出現點と逸出點とに渾身の注意力を視神經に集中して凝視し、嚴肅裡に殆んど強直した儘半秒毎に刻んで行く時報の聲に早鐘の如く高鳴る鼓動を感じつゝ終ひに豫定の47分10秒となつた。1秒過ぎた5秒過ぎた。1分経つた。5分経つた。噫終ひに水星は吾等の網膜を刺戟する事なく再び悠久なる

天空の彼方に逸し去つたのであつた。以上當日臺中二中校庭に於ける吾々アマチュアの観測を端的に御紹介するのである。尙公文氏及び松本氏は豫定よりも數分経つて時折瞬間的に其らしいものを微かに認め、松本氏も前回の経験から水星の影らしいと云つてゐられるが、當日は太陽像が極めて悪く、何等確言は與へられないとの事である。實際當日其の時刻には如何にも晴天ではあつたが、この季節に於ける當地方の殆んど常態とも云ふ可き氣流の錯雜が殊に烈しく、太陽のリムは至る所無數の漣を打つて暫しも止む事がなかつた。こんな場合に太陽の200分之1程度の直徑を有する水星が、然かも其のディスク全部を没入するでもなく最大7割程度の接觸をすると云ふのは、恰も荒天風浪の日、不可視の水線下より突如として小艇が現はれ、忽として再び線下に没するが如きもので、極めて困難な事であるに加ふるに、5時と云へば太陽の高度も低く、これが與つて益大氣の動搖を引起したものと信するのである。

以上の観測に依つて得た吾等の経験は、一般大衆に對する大なる啓發であらう。又遊星の運行と云ふ事丈でも如何に最密な計算と最上の天候と最良の装置とそして極度の忍耐とを要するものであるかを経験し、同時に天體の運行は常に最新のデータを基礎とし、多次元的な計算を経て之を観測と對照して將來に備へ、如何に専門家が實象を中心に努力を集中するかを一般大衆に周知せしむるには最良の機會であると信するものである。

「あれは成功である」、  
「いや、あれは不成功である」と云ふ素人はかく評しながら漸次理解を進めてゐると謂ふ可きである。吾等の如きも亦望んで得られないこの嚴肅な氣分に暫くでも浸り得た幸福を感謝すると同時に公文氏の精勵に敬服するものである。

×——×——×

×——×——×

當夜は同好の3名、松本、津野田、公文の3氏はブラシヤ1でωセンチウルを見、南十字を地平線上に可成り高く眺めて少時晝間の苦闘を打忘れて天界の美觀を嘆賞したとの事である。望遠鏡の直ぐ傍にある水田には、稻穂が揃ひ、そろそろ毒蛇アマガサが附近を漫步する頃とある。(編輯子)